ージに、室が再現の無さ」3人の学に不満を学部OB野憲樹准Dの専門年の今宮問に答え生かしてのが学生員、学生われず議

ーティング。お菓子をつまみながら、日ごろの不満や理想の授業などを率直に語り合う。次は学部の枠を外しての「オール日大ミーティング」。他学部の現状を知り、自分たちに生かす知恵を探る。最後に学部ごとに、良い点、改善すべき点について話し合い、報告書を作成。大講堂に戻り法、理工、医の3学部が成果を発表した。

「この会合を学部に持

付属高校などを設置する10法人との準付属契約更新の調印式が2月20日、日本大学会館で行われた＝**写真**。

調印式に先立ち田中英壽理事長、大塚吉兵衛学長のあいさつが行われ、その後、田中理事長と各学校法人の理事長10人が順次、契約書に署名、捺印。4月1日から3年間の契約が成立した。これにより、特別付属校を含む準付属高校、中等教育

学校は従来通り、日本大学推薦入学試験制度を利用できることになる。

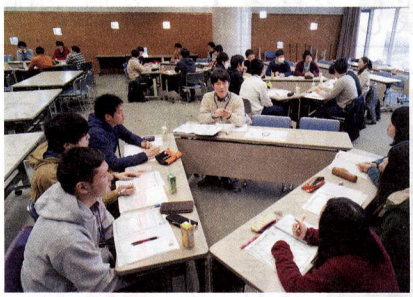
2次試験突破へ 2泊3日の合宿

公務員試験支援センター

平成26年度公務員試験に向けた活動が4月に始まるのを前に、日本大学公務員合宿（本学公務員試験支援センター主催）が2月21日から2泊3日

験合格後の2次試験（面接試験、論文試験）対策に重点を置いたプログラムに取り組んだ。

合宿は同支援センターの高橋努副センター長（理工学部教授）の激励のあいさつでスタート。講師の指導の下、面接カードの個別添削から面接試験の模擬体験まで3日間にわたって集中して研修に取り組んだ。論文試験



職試験等に合格した4年生二人（判明分）に高橋副センター長から奨励金（10万円）が授与された。

本学の佐藤正弘監事がこのほど、「ジュニア防災検定」を実施する一般財団法人「防災検定協会」の顧問に就任した。検定への参加で付属高校・中学の生徒にも、防災や危機管理への意識を持ってほしいと佐藤監事は期待する。

東日本大震災では多くの子どもたちが巨大津波にのまれるなどして命を落とした。佐藤監事は「悲劇を二度と起こさないた

東日本大震災から3年が経過した。悲惨な経験に学ぼうと、資格認定団体が行う検定制度を活用して、生徒の防災意識を高める取り組みが本学付属中学で始まっている。

この制度は、内閣府が後援する防災検定協会のジュニア防災検定。第1回検定テストが昨年12月に行われ、豊山中、佐野中等の、いずれも1年生が受検し、全員が合格した。中でも優秀な成績を収めた豊山2人、佐野1人の生徒が、都内で2月2日に開かれた合格証授与式に招かれ、同協会の平野啓子理事長（元NHKキャスター）から賞状を渡された＝**写真**。

検定は単に知識を問うテストだけでなく、その前後にもクリアすべき課題を提示。三つのステップを踏んで「自ら考え行動する防災力」を身につけてもらうのが狙いだ。

事前課題は「わが家の防災対策」などのテーマで、両親やきょうだいと話し合う。事後課題は防災マップ作成や防災作文などで、検定後に指示される。

日大中も今年1月、1年生約240人全員が受検した。同校は定期的に避難訓練や救命救急訓練を実施。検定受検により保護者ぐるみで、防災について考えてもらうことにした。

材づくり
講習を実
る文理学
佐の小杉
専任講師
自作のパ
像を使っ
露した。
現代史が
が登壇。
としてスタ

ートした本学が、学祖山田顕義の急死、関東大震災や第2次大戦、「日大闘争」とさまざまな困難に直面しながらも、時代の要請に応じて理工、医歯薬系など学部を増設。教育・研究基盤の強化、規模拡大、待遇改善などを果たしてきたと語った。

れる第30回福島県建築文

家」群が賞受賞

学部

能な生活
する工学
ロハスの
がこのほ
おいて周
環境上優
等に贈ら

化賞復興賞を受賞した。

同復興賞は東日本大震災被災の経験を経て今回創設され、受賞にあたっては脱原発の新エネルギー導入の重要性や教育現場でのサスティナブル思想実践の必要性などのメッセージを発信している点が評価された。

受賞した建築群は「ロハスの家1号」から「同3号」までの3棟からなり、各実験施設では再生可能エネルギーによる快適な生活、太陽熱を活用した健康的な暮らし、生活エネルギーの自立した家を追究している。

今回の受賞について、出村克宣学部長は「本学部がコンセプトとする『ロハスの工学』の象徴的研究施設が受賞したことは大きな喜び」と話している。

1月17日に福島市内で表彰式が行われた。

プラスチックを短時間に成形する技術を実用化

生産工・邉教授ら

邉教授

生産工学部機械工学科の邉（べん）吾一教授らが炭素繊維強化熱可塑性プラスチックを簡易な装置で短時間に成形する技術の実用化にめどをつけて、各方面が注目。とりわけ夢の技術とされる炭素繊維カーの量産化に先鞭をつけると、自動車メーカーなど国内外の企業から問い合わせが相次いでいる。

従来の炭素繊維強化熱可塑性プラスチックは高い強度と軽さを併せ持つ炭素繊維と熱可塑性樹脂の複合材料の一種で、熱を加えると軟化し、再利用可能なのが強み。ただし成形には240度以上の高温と数十気圧の圧力を加えなければならず、設備費やエネルギーなどのコスト高から、自動車産業に不可欠な量産には不向きとされてきた。

邉教授らが今回新たに確立したのは、真空ポンプだけでカーボン樹脂を金型に注入して、真空成形する方法。大規模な設備が不要の上に、比較的低い温度で成形できるため、時間は従来の10分の1に短縮、連続成形も可能になったという。

このため、カナダで昨年に開催された国際複合材料会議の基調講演で発表されて以来、「コスト面からも量産する自動車生産でも活用できそう」と関連業界の話題を集めている。

脳卒中の最新治療 開頭せず障害除去

医・須磨准教授が講演

脳卒中に関する公開講座が2月15日、東京・池袋のホテルメトロポリタンで開催され、医学部の須磨健・診療准教授が「脳卒中の最新治療について」の演題で講演した＝**写真**。開頭手術や穿（せん）頭術をしない最新の治療法を、動画などを使って分かりやすく解説した。

脳卒中は脳出血、くも膜下出血、脳梗塞など脳血管障害の総称。最も多い脳梗塞では、発症から4時間半以内に血栓溶解薬を使えば脳への血流が復活する。「兆候があったら早期に受診を」と須磨准教授。

くも膜下出血の多くは脳動脈瘤（りゅう）破裂で起きる。従来の手術に代わる治療法として注目されるのが「コイル塞栓術」。脚の付け根から動脈にマイクロカテーテルを挿入し、脳動脈瘤にプラチナ製のコイルを充填（じゅうてん）する。

これらの治療法は体への負担が少ないが、カテーテルで血管を傷つけたり、血栓溶解薬で出血しやすくなったりするおそれがある。放置しても問題がない動脈瘤もある。「治療が必要か。どの治療法を選択すべきか。リスクと効果を慎重に判断すべきだ」と語った。